夜光幻想

訳　村　松　眞　一
（静岡大学名誉教授）

月はまだ昇っていなかった。広大な夜空は、満天星くずで湧きたち、異常に明るい銀河の橋がそこに架けられていた。風はなかった。しかし海は、見渡す限り火のさざ波を立てていて――冥界の美のまぼろしを見るよう。もっぱら、さざ波だけが輝き（波間は暗黒そのもの）、しかも、その明るさは、驚くばかりであった。波のうねりは、おおかた蝋燭の火のように黄色であった。が、なかには深紅の灯もあり、空色、橙、エメラルドもあった。くねくねと続くそのきらめきは、波立つ海水の脈動と言うより、数多（あまた）の、意志あるものの奮闘――知覚をもった、奇怪きわまる流動――どこか暗黒界の淵にいる竜の類いのように、身をよじっているさま、数知れず群がっているさまを思わせた。

そして実は、生命こそ、その光景に気味わるい光彩を与えているものにほかならなかった。ただしそれは、微細な、極めて霊妙な生命――果てしなく広がりながら、カゲロウのようにはかない生命で、水平線までも、海面全域にわたって絶えず明滅をくりかえし、その上方の虚空には、他の無数の光が、これまたさまざまな霊的色合いで脈打ちつづけていた。

じっと眺めながら、私はその驚異にうたれ、夢見る思いがした。私は、その「夜」と「海」の、途方もなく広く、ピカピカときらめく光に現れた「窮極の大霊」に思いをはせた。――それは、私の頭上で生き生きと、解体した過去を、再生すべき生命の気体とともにおそろしくも融合し、赤々と輝く星々の体系を作りあげ――また下でも生き生きと、いくつもの流星を噴出させ、星座を配置し、冷（さ）めた炎の星雲状天体を生み出している――こう考えているうちに、やがて私は不断の解体の流れの中では、恒星の何百億年という寿命も、絶えんとする一匹の夜光虫の、束の間のきらめきと比べて、果たしてどれほどの意味をもつのかと疑い始めていた。

そんな疑いを抱いたままで、私の幻想は変わっていった。私が見ているのは、もはや、震える火が浮かぶ古い東洋の海ではなくて、「永遠」の夜と、幅、奥行き、高さが同じ海――岸辺もなく時間もない「生」と「死」の大海であった。そして何億という恒星が集まって、光り輝いている靄――あの銀河のアーチも――その無限の大潮の流れの中にけぶっている波のひとうねりでしかなかった。

しかし、またもや私の幻想は変わった。もはや、あの靄のようにかすむ恒星群の波は見えない。生きている闇が、限りなくピカピカと光を発しながら、私のそばを震えながら流れてゆく。そのきらめきの一つ一つが、心臓のように鼓動し、「不知火」のようなさまざまな色を、脈打ちながら見せていた。そして輝くすべての灯が、震える幾すじもの光の糸のように、果てしない神秘の中へと、絶え間なく流れこんで行った。

それから今度は、私自身も燐光の一点――計り知れない流れに浮かぶ、束の間の一個のきらめきにすぎないことがわかった。そして私がきらめく光は、思想が変わるたびに、その色が変わるのであった。紅玉（ルビー）の色に光るかと思えば、

青玉色（サファイア）に光ることもある。いま黄玉（トパーズ）の炎のように見えたかと思うと、次には緑玉（エメラルド）の火に見える。その変化の意味は十分にはわからなかった。しかし現世のことを考えると赤く燃えるように見え、天界のことを考え、精霊の美や精霊の至福を想うとき、空色や菫色の、言うに言えない光の抑揚となって輝くように見えた。

しかし、「可視」の世界のどこにも、白い光というものはなかった。これには驚いた。

すると、どこからか「声」がして、私にこう告げた――

「白い光は最高位のもの。億兆の光を混じて、それは作られる。お前の役目は、それらの灯をともす一助となること。お前が輝くその色が、お前の価値に他ならぬ。お前の活動は、ほんの一瞬。しかしお前の脈動の灯は生き続ける。お前の思想によって、それが光り輝く一瞬、お前は神々を作る者の一人になる。」